

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報

No. 106

2009(平成21)年8月9日(日)発行

<1945(昭和20)年8月9日午前11時2分、アメリカ軍は長崎に2発目の原爆投下>

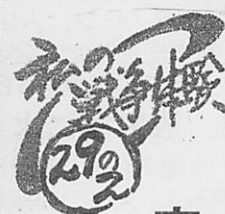
はじめの目標は、長崎ではなく小倉だった! ●午前2時49分、原爆ファットマンを搭載したB29爆撃機ボックスカー号は、北九州の小倉をめざして太平洋上のテニアン基地を出発した。しかし小倉上空は雲がかかっていて投下目標を捜すのに3回も旋回したが、確認できず、燃料不足を考慮してついに断念し、第2目標の長崎攻撃に変更する。●小倉から南下し、熊本方面から島原半島を経て長崎へ。10時58分長崎上空に達するが、雲量8で視界はほとんどきかなかつた。ビーハン爆撃手はレーダーによる投下の準備にかかったその時、わずかの雲間から長崎製鋼所を発見し、すばAやく投弾ボタンを押した。11時2分爆発。機は投下と同時に反転し東方へ向かって脱出、沖縄に向かう。●午後1時沖縄に着陸。残り燃料わずか数ガロンであった。

Aさんの被爆体験「前編」の様子

◆大正九年相馬市生まれのAさんは召集され横須賀の海軍に入り、南太平洋の激戦地で戦います。横須賀に戻った敗戦間近、「長崎の海軍武官府へ秘密兵器を受け取りに行け」という軍の命令が出て、昭和二十年八月六日、Aさん四人は横須賀を出発します。◆ところが広島の手前の駅で汽車は止められ、原爆投下翌日の七日、広島街を歩いて通過し、二次被爆します。◆九日の朝つゆく長崎に到着し、長崎駅近くの旅館で食事待っていた午前十一時二分、直接の原爆投下に遭遇します。気がつけば諫早の海軍病院で大怪我の手術を受けていました。

被爆の影響で次第に体に異変が

原爆病という病気はないと思います。俗に言うそれは、放射能が体内の白血球を破壊するため、抵抗力が弱まって他の病気にかかりやすくなるのです。私の場合、翌年の二十一年頃から次第に全身がだるくなり、坐っているにも横になってもだるく、なにをする気にもなれません。被爆者はよく「ブラ病」と呼ばれて、白い眼で見られ



広島と長崎で二度の被爆を体験

顔も変形し、人目を避けての生活

相馬市原釜 Aさん(故人 匿名)

<後編>
前編はNo.104

<長崎>の被爆地図

(1945年8月9日午前11時2分)



ていまして、本当にそうなんです。また胃腸に変調をきたし痛みもあり食欲も減退して、半年ほど相馬公立病院に入院したこともあります。それまで滅多にひかなかった風邪も度々ひくようになりました。

被爆前の顔とは全然違った人相に
また先程もお話しましたが、被爆の時、顔の右半分がやられ、頬のガラス片の跡も残り、その手術の後遺症だと思いますが、右の耳の耳鳴りがひどく、右の眼は視力が衰えて常に涙がたまるようになり、また引きつった唇からは涎(だれ)が絶えず流れるようになり

ました。被爆前の私の顔とは全然違った人相になってしまい、昼間はなるべく外出しないようにし、性格も変わってしまいました。

人間嫌いになり

極度に人前を避けた

歳とともにシワも増えてきましたが、顔の右半分は神経が麻痺してしまつたためシワがありません。この通り右半分はすべすべしているでしょう。左右の顔が全然違うのです。この異常を隠すため、外出の時は年中頬かぶりや防寒帽やマスクなどをします。

しかし、親戚や知人の冠婚葬祭の時は困ってしまいます。まさか頬かぶりをして結婚式に出席するわけにもいかず、できるだけ妻をやつたりしますが、やむなく義理を欠いてしまう時もあり、極度に人前を避け、人間嫌いになってしまいました。

(裏のページへつづく)

■この体験談は、1983(昭和58)年に「原水爆を考える原町市民の会」編集発行の『私も証言する』から転載しました。
●2004(平成16)年の調査で「二重被爆者」は、全国で165名(広島・長崎の直接被爆者は9名)が判明しています。

●原子爆弾の人に与えた3つの被害●

1. 熱戦による被害

原爆が炸裂すると表面温度が6,000度の巨大な火の玉ができ、大火傷や脱水状態になり多くの命が奪われた。石やコンクリートの上に影だけを残して瞬時に死亡した人もいる（「人影の石」）。爆心地から約600mで2,000度もあり、屋根の瓦は表面が熔けてブツブツの泡状になった。2km離れても線路の枕木は自然着火した。

2. 爆風による被害

高熱の火の玉で空気が膨張し爆風が生まれた。秒速4.4kmで、その圧力は1㎡あたり4.5～6.7トン。人は吹き飛ばされ、失神、負傷や圧死した。2kmで木造家屋は全壊し、窓ガラスの破片は16kmまで及んだ。

3. 放射能による被害

原爆の特徴。約4kmの地域にまでその威力が及ぶ。人体の血液が侵され、骨髓などの造血機能、さらに内臓に障害を起こす。1km以内にいた人は数日中にほとんどが死亡。体内に侵入した放射能は「原爆症」として今でもさまざまな障害を与え続けている。放射能を含んだ「黒い雨」でも被害は拡大した。

現在ではこの数百、数千倍の威力を持つ水爆はじめ各種の核兵器が開発されている。

（表のページより）
鮮魚の行商で生計をたてるが

昭和二十三年ごろから徐々に体も快方に向かったので職をさがしました。以前の職のプレス工への復帰は、七年以上のブランクがあるし体も弱いし、とてもかかないませんでした。それで鮮魚の行商や小型漁船の漁で生計をたてました。

しかし、体は元通りになったわけではなく、二日働いては一日休むという毎日でした。子供四人を育てなければなりませんから、苦労話はいくらでもあり語り尽くせません。

大手術後 毎日通院するようになる

昨年昭和五十七年一月には、変形性脊椎症で大手術をしました。右手がしびれて痛み、夜も眠れないほどでした。被爆した時に投げ出されたためか、ち

ようどむち打ちのような症状でした。手術は右下腹の軟骨を切り取り、それを頸椎に移植し、四月に退院しました。ところが、退院する頃から今度は、腰が痛み、両足もつづばつてしびれがひどいのです。ずっと病院通いで仕事にもつづけず困ってしまします。毎日通院で治療には午前中いっぱいかかり、今日も行ってきました。

悲惨な体験は私だけでたくさん戦争は二度とあってはいけません。戦後三十七年経つた今でも、こんなふうにも生活や治療でこの傷を背負って生きていかなければなりませんし、全く不安です。こんな悲惨な体験は、もう私だけでたくさんです。こんな戦争は二度とあってはいけません、繰り返してはいけませんと思います。

悲慘な体験は私だけでたくさん戦争は二度とあってはいけません

戦後三十七年経つた今でも、こんなふうにも生活や治療でこの傷を背負って生きていかなければなりませんし、全く不安です。こんな悲惨な体験は、もう私だけでたくさんです。こんな戦争は二度とあってはいけません、繰り返してはいけませんと思います。

長崎 平和祈念像



高さ9.7m。長崎市松山町の平和公園の北端にある。投下から10年後の1955年8月8日完成。北村西望がデザイン。神の愛と仏の慈悲を象徴し、垂直の右手は原爆の脅威を、水平の左手は平和を、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っている。

とにかく原爆なんていうものは、はじめなんですよ。残酷そのものです。諫早の病院では、今まで隣のベッドで元気に話していた人が、急に死んでいくんですよ。本当にショックでした。そんなことを私は目の前で幾度も見えてきて、自分もこんな傷を負ってしまい、戦争はもうたくさんです。

長崎の被爆だけがようやく認定される

私が被爆者としてもらっている手当についても大変不満です。広島で二次被爆、長崎では直接被爆と二重に被爆していても、長崎の場合だけがようやくのことで認定をうけられました。

認定されるまで二、三十ページの申請書を作成するのですが、詳しく私にはとても書けないので、いろんな人にお世話になりました。

それに、お金の話で申し訳ありませんが、私がいただいているのは健康管理手当という種類で、月額一万四千元。それも病気の間だけの三年間内です。仕事もできないで月二万四千元で、今

どき何を買えますか。軍の命令で被爆して苦労して、馬鹿をみただけと腹が立ちます。海軍だから軍艦に乗っている期間だけが恩給の対象で、これも少額です。正直言つて本当にもっと優遇してもらわないとどうしようもありません。

しっかり生きていかなければ……

年一回の定期検診は受けていますし、何か相談があれば原町の保健所に行き、係のYさんに話します。Yさんは本当に親切に説明してくれたり、手続きなどもよくやってくださって、心から感謝しています。

とにかく、そんなことを言っても、娘三人、息子一人もみんな結婚して、孫も四人になり、今では女房と二人暮らしです。

こんな体で本当にあの時死んだ方が良かったのではと、以前は考えたこともありましたが、しっかり生きていかなければと思います。

（二九八三（昭和五十八）年一月六日談）

◇ ◇ ◇

●Aさんの被爆体験は、広島で二次被爆、長崎では直接被爆の、いわゆる「二重被爆」です。はじめは、こんなことって本当にあるのかと信じられませんでした。

●世界中に核廃絶の機運が高まってきた今こそ、「悲惨な原爆や戦争を繰り返してはいけません」というAさんの遺志を伝えるため、家族のご理解のもと「私の戦争体験」に掲載させていただきましました。

●「ヒバクシャ」という偏見の中で、私たちに被爆体験を話されたAさんのその勇氣と誠意に感謝しつつ、重ねてご冥福をお祈り申し上げます。